

# 平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

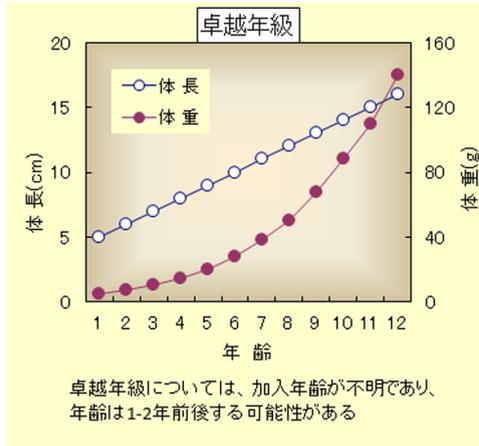
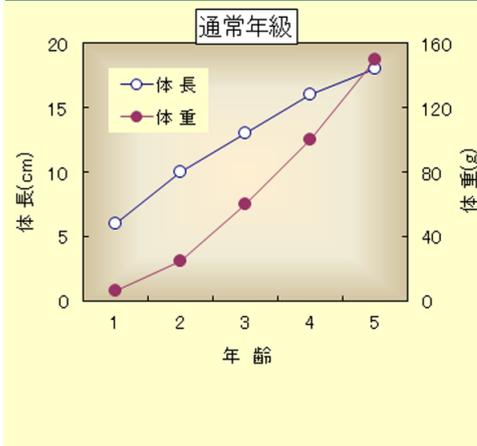
系群名 道東・道南

担当水研 北海道区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 不明  
成熟開始年齢: 3歳  
産卵期・産卵場: 春季(3~5月)、産卵場は恵山海丘、襟裳岬沖、釧路沖、落石沖の山状の地形の周辺(水深400~850m)  
索餌期・索餌場: 北海道太平洋側沖合の一帯に分布し、主な分布水深は300~900m  
食性: クモヒトデ類、ヨコエビ類、オキアミ類、エビ・カニ類、多毛類、魚類など  
捕食者: マダラ、アブラガレイ、キチジ(共食い)

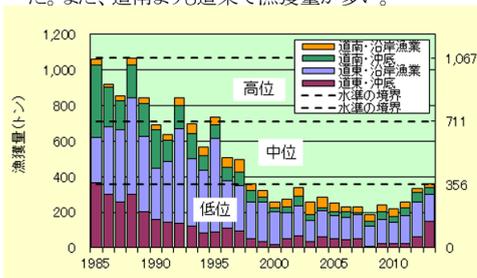


## 漁業の特徴

沖合底びき網漁業(沖底)の他、えびごぎ網(旧エビ桁網)や刺網などの沿岸漁業により周年漁獲されている。

## 漁獲の動向

道東と道南における沖底と沿岸漁業の漁獲量は、長期的には減少傾向にある。1985年まで1,000トンを超えていた漁獲量は、1997年に500トン进行込み、1998年以降は200~360トンにまで減少した。2010年以降は増加し、2013年の漁獲量は363トン(暫定値)であった。近年の漁獲量は、沖底よりも沿岸漁業の方が多かったが、2013年には逆転した。また、道南よりも道東で漁獲量が多い。



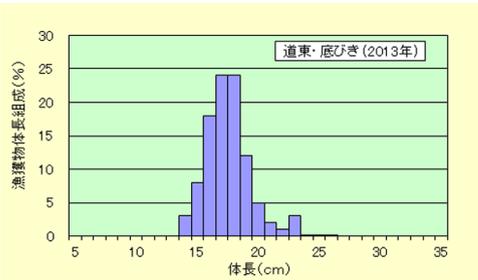
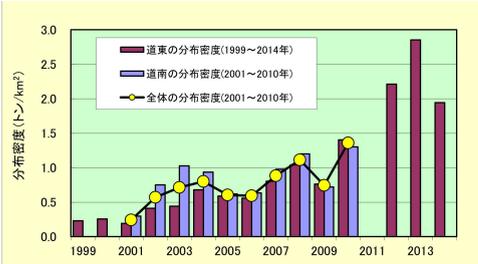
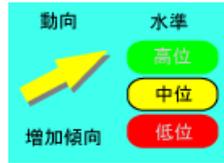
## 資源評価法

当業船のキチジに対する漁獲努力量の把握が困難なことから、漁業データとして、漁獲量を用いた。漁船漁獲物から採集した標本と銘柄別水揚げ記録を用いて、漁獲物の体長組成を推定した。さらに、1999年以降は底魚を対象とし

た北海道太平洋沖合域のトロール調査によりキチジの分布密度を推定しており、これを近年の資源量の指標値として利用した。

**資源状態**

各海域の漁業種類別の漁獲データがそろい1986年以降の過去28年間(1986～2013年)の漁獲量から、資源水準は最高値～0を3等分して高・中・低位を設定し、2013年の資源水準を中位と判断した。また、道東海域における分布密度は、1999年以降増加傾向を示しており全体の分布密度も、2001年から増加傾向にある。2010～2014年までの5年間(ただし2011年は除く)の道東海域における分布密度の変化から、資源動向は増加と判断した。



**管理方策**

資源水準は中位と判断されたが低位に極めて近いいため、資源量の回復を管理の目標とし、基本規則2-1)に従いABCを算定する。豊度の高い年級群が成熟するまで獲り残し、親魚量を増加させることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	240トン	0.8・Cave3-yr・0.94	—	—
ABCtarget	190トン	0.8・0.8・Cave3-yr・0.94	—	—

- 年は暦年(1～12月)
- ABC算定規則2-1)に従い、ABCは $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した
- $\gamma_1$ は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/d)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、bとdは資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である
- Cave3-yrは2011～2013年の平均漁獲量、 $\alpha : 0.8$

**資源評価のまとめ**

- 2013年の資源水準は中位であるが、低位に近い
- 資源動向は増加

**管理方策のまとめ**

- 資源量の回復のため、漁獲努力量の削減が必要
- 豊度の高い年級群が成熟するまで獲り残し、親魚量を増加させることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される
- キチジの餌生物(定着性小型魚、エビ等)が生息可能な海底環境の保全・復元を図ることが、資源回復にとって不可欠である

執筆者: 濱津友紀・森田晶子・船本鉄一郎

資源評価は毎年更新されます。